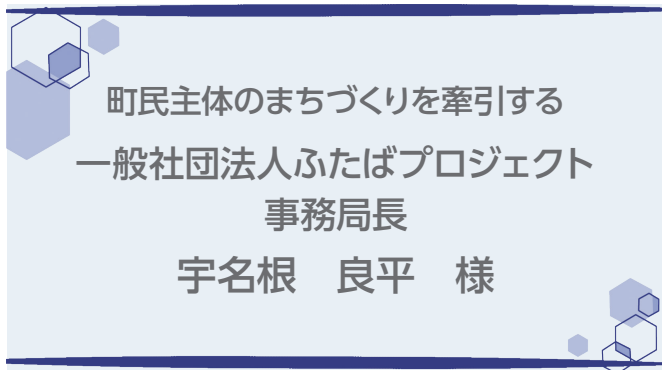


放射線リスクコミュニケーション

相談員支援センターだより



一般社団法人ふたばプロジェクト（以下、ふたばプロジェクト）は、「町と人」「人と人」をつなぎ、町民主体のまちづくりを実現するため、平成31年3月に設立されました。町民の多様なニーズを把握・分析するとともに、民間事業者等との連携・協働を積極的に進めながら、帰還や移住・定住を見据えた取り組みを推進しています。

— 普段は主にどのようなお仕事をされていますか。

ふたばプロジェクトの事務局長として、組織全体の統括をしながら、町との調整、復興支援員の指導等を行っています。また、渉外担当として、他団体との調整も行っています。

— 東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故の発生当時はどこにいらっしゃいましたか。

双葉町役場の住民生活課に勤務しており、庁舎内で仕事をしている際に地震が発生しました。すぐに庁舎の周辺を見回り、倒壊の恐れがないか確認するとともに、庁舎4階から町内で火災が発生していないかを確認しました。私は防災無線のアナウンサーを担当していたため、津波警報や原子力発電所が危ないという情報を受け、町民に避難を呼びかけました。経験したことのない出来事の連続で混乱しましたが、町民の方々の命を守ることを最優先に考えていました。

— 令和4年8月30日に特定復興再生拠点区域の避難指示が解除され、役場の新庁舎も開所されましたが、どのような思いですか。

双葉町にとって再出発の好機でもあり、通過点でもあると思います。人が住めるようになったからといって、急に人口が増えるわけではありません。町内にはまだ生活に必要な施設が十分に整っておらず、特に病院や学校は生活基盤を置く上で重要な施設だと思います。ハード面の整備だけでなく、帰還者と移住者の新たなコミュニティ形成に時間がかかると思われます。

— 帰還や移住・定住を促進するために取り組んでいることはありますか。

町内での居住場所の確保を目的として、ふたばプロジェクトのホームページにて「双葉町空き家・空き地バンク」を運用し、所有者と利用希望者のマッチングを支援しています。空き家・空き地に関する情報提供や連絡調整を行い、不動産事業者と連携してスムーズな交渉・契約ができるよう事業を進めています。

—実際に町を訪れる方もいらっしゃるのでしょうか。

はい。移住に興味があつて直接相談に来られた方もいました。町の環境や人の温かみなど、実際に訪れてみないと分からない部分もあると思うので、情報発信や様々な取り組みを通じて、町に関心を持ってくれる方や来てくれる方を増やしていきたいです。

ふたばプロジェクトでは、交流人口の増加を目指して、東日本大震災・原子力災害伝承館や近辺施設の視察・研修ツアーも行っています。震災や原子力災害について学び、自分事として考えてもらうことで、風化防止につなげることを目標としており、これまでに学校や企業等の方々に参加いただいています。

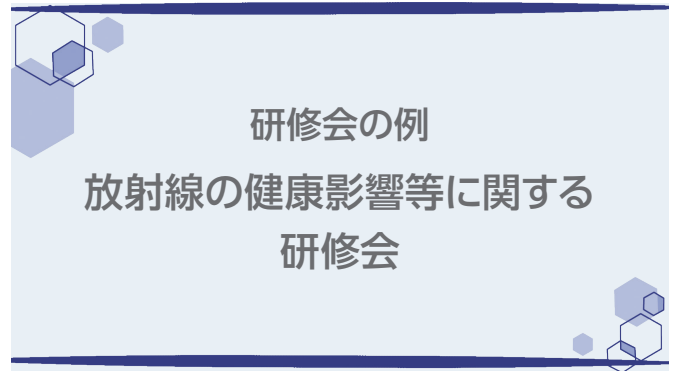
—移住・定住を検討されている方やツアーに参加された方から放射線に関する不安の声などはありますか。

今のところは放射線に関する不安の声などを直接耳にしたことはありません。しかし、放射線は目に見えないものなので、口に出さないだけで潜在的に不安を抱いたり怖いイメージを持っていたりする方はいると思います。「安全」と「安心」は言葉が似ていても違います。「安全」は例えば科学的なデータ等によって立証できますが、「安心」の基準は人それぞれ異なります。そのため、どのように「安心」を培うか、また生み出すかということを工夫して考えていきたいです。

—安心に関する考え方はリスクコミュニケーションに通じる話だと思います。今後はどのような活動をしていきたいと考えていますか。

帰還される方と新たに住んでくれる方の両方を巻き込んでこそ本当の再生だと考えています。今後町に住み始めた方々が何を求めているか把握し、共に考えながら様々な提案ができるようにしたいです。町民主体のまちづくりを目指し、試行錯誤を繰り返しながら、町民の皆さんとともにコミュニティの再構築に取り組んでいきたいです。

—将来を見据えて、これからも町とともに歩んでいく姿勢を感じました。本日はありがとうございました。



令和4年8月1日、福島市のとうほう・みんなの文化センターにて、福島県内の保健医療福祉関係者、相談員、学校教員等を対象に、放射線の健康影響等に関する研修会を開催しました。今回の研修会は、住民からの相談対応や教育に関わる対象者が、放射線の基礎知識と健康影響、福島県で実施されている県民健康調査の概要、福島県における環境省の取組、リスクコミュニケーション、心のケア等について理解を深め、正しく伝えられるような知識を身につけることを目的として、会場とオンラインの同時開催で行われました。

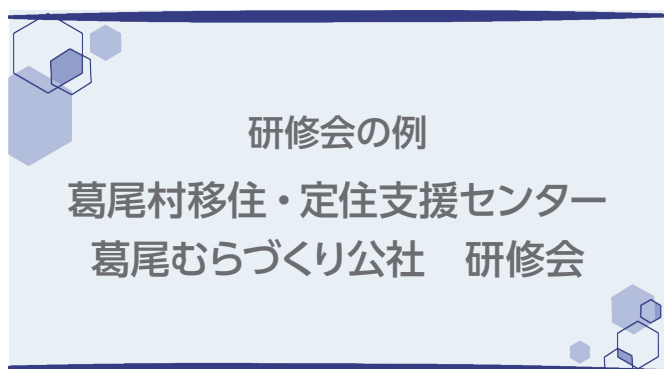


はじめに、福島県立医科大学の坪倉正治教授を講師に迎え、放射線の基礎知識と健康影響に関する講義を行いました。福島第一原子力発電所の事故がもたらした健康問題について説明するとともに、放射線、放射能、放射性物質の違いや放射線の単位等の基礎知識、放射線の人体への影響等について説明がありました。次に、福島県県民健康調査課より福島県の県民健康調査の概要や結果等について、環境省福島地方環境事務所より福島への復興・再生に向けた環境省の取組について、それぞれ情報共有が行われました。その後、リスクコミュニケーションの基礎について講義を行いました。一般社団法人複合リスク学際研究・協働ネットワークの土屋智子理事が講師を務め、リスクコミュニケーションの生い立ちや、現在の新しいリスクコミュ

ニケーションに関する説明を通じて、相談対応者としての役割や傾聴の心構え等について学びました。最後に、玉川大学の原田眞理教授がオンラインにて心のケアに関する講義を行いました。被災体験やストレスによる心への影響、相談対応者が留意すべきポイント等をテーマとして、心のケアの必要性や、心のケアにおいて大切なことについて説明を受けました。



研修会開催後のアンケートには、「どの講義の説明も資料とともに分かりやすかった。情報提供は、もう少し時間をかけて聞きたかった。リスクコミュニケーションや心のケアの講義内容は、放射線教育に限らず、普段の学校での業務に役立つものだった」、「今の子どもは放射線のことを考えたり話したりする機会が少なく、知識が不足しているために、漠然とした不安を感じている印象を受ける。まずは知識を身につけ、放射線の健康影響等について正しく知ることが不安軽減につながると思う」等の感想がありました。参加者の皆さんには、今回の研修会で得た知識を役立ててもらえると嬉しく思います。



令和4年8月31日、葛尾村復興交流館あぜりあにて、葛尾むらづくり公社ならびに葛尾村移住・定住支援センターの職員を対象とした研修会を開催しました。福島大学共生システム理工学類の河津賢澄客員教

授を講師に迎え、放射線の基礎知識に関する講義と放射線の測定実習を行いました。

講義では、放射線、放射能、放射性物質の違い、放射線の半減期、放射線の種類による透過力の違い等の基礎知識に加えて、身の回りの放射線、放射線による健康影響について学習しました。参加者の全員が葛尾村への移住者であり、これまで放射線について学ぶ機会がなかったとの声もあったため、一つ一つ河津先生が丁寧に説明をしました。



実習では、まず GM 計数管式サーベイメータを用いて、身の回りの物の測定を行いました。ポテトチップス、食塩、やさしお（塩分の半分を塩化カリウムに置き換えた塩）、肥料、鉱物、昆布の計6種類の試料を用意し、はじめに放射線を多く出す物を予想してからそれぞれの放射線量を測定しました。次に福島第一原子力発電所から80km圏内や葛尾村役場における空間線量率の経年変化について説明し、その後、NaIシンチレーション式サーベイメータとRadiを用いて、実際に会場周辺の空間線量率を測定しました。



研修会開催後のアンケートには、「普段生活している中に、どの程度の放射線があるのか数値として理解できた。公社職員が持っている圃場で採れた野菜や、

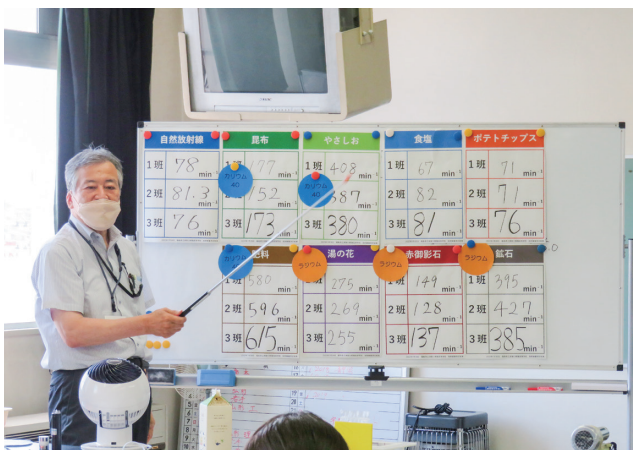
山菜、きのこからどの程度の放射線が出ているのかも気になった」、「非常に分かりやすい内容で多くの学びがあった。修学旅行等で村を訪れた生徒に震災の経験や福島の現状を伝える仕事もしているため、今回得た知識を無駄にせず伝えていきたい」等の声がありました。

今後、移住を検討している方から放射線について質問があった際などに、今回の研修会で学んだ内容を生かしてもらえると嬉しく思います。

住民セミナーの例

福島県立須賀川桐陽高等学校 放射線教育

令和4年7月30日、福島県立須賀川桐陽高等学校にて放射線教育を実施しました。福島県立須賀川桐陽高等学校では、令和2年度より2年生の希望者を対象として、震災や原発事故、事故後から現在に至るまでの福島の歩みについて学ぶことを目的とした「福島探究ゼミ」を行っています。今回は、放射線に関する知識を深めるための学習として、原子力安全研究協会の松原昌平先生を講師に迎え、放射線の基礎知識についての講義と放射線の測定実習を行いました。



講義では、福島第一原子力発電所事故の概要、放射線の種類・性質等の基礎知識、また放射線による健康影響等について学習しました。講義の至るところで、松原先生から生徒の皆さんに問いかけを行いました。その度に一人一人が考えて回答する様子が見られ、

双方向性のある授業となりました。

実習では、GM 計数管式サーベイメータを用いて、身の回りの物の測定と外部被ばく低減三原則を学ぶ測定を行いました。まず、身の回りの物の測定では、食塩や昆布等の計8種類の試料を用意し、それぞれの放射線量を測定しました。はじめにどの試料の測定値が最も高いか予想をしてから測定をしましたが、予想とは違う結果に驚きの声も上がっていました。次に行った外部被ばく低減三原則を学ぶ測定では、測定キットと遮へい板を用いて、「距離」、「時間」の変化、また「遮へい」によって、放射線量にどのような違いが生じるか学習しました。測定結果からグラフを作成したり、遮へい板による透過率を計算したりしました。



授業の最後に、講義や実習を通して感じた疑問について、松原先生に質問をしました。例えば、「今回の実習では、遮へい材にアクリル板とアルミ板を使用しましたが、実際に放射線を利用する場所での遮へい材はどのように決めているのか」という質問に対し、「放射線の種類とエネルギー量によって遮へい材とその厚みを決定する。例えば、X線を使用する医療現場では、厚さ3mmほどの鉛の扉や鉛のエプロンが使用されている」との回答がありました。

今回の学習をきっかけに、放射線について正しく理解し、これからの「福島探究ゼミ」の活動で得る知識や経験と合わせて、今後広く発信してくれることを期待しています。

放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより No.32

発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町1-6
いわきセンタービル5階、6階

フリーダイヤル：0120-478-100

FAX：0246-35-5158

E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

